

2003年7月19日(土曜日)

図書新聞

THE BOOK REVIEW PRESS

2638号

発行 読者登録部
〒101-0051 東京都千代田区神田東區本町2-18
電話03(3234)3471 FAX03(3261)4837
編集室(株松井)1F48号11520F
〒半24号6240E 東京0160-9-75883

定価240円
(本体229円)

『あゝ野麦峠』を通して「教育学」の回路を

村木哲

▼島岡光一編著『野麦峠に立つ経済学—あなたの本気が世界を変える』5・8刊、四六判三〇八頁、本体二五〇〇円・春秋社

編著者は、大学の教育学部の教員である。しかも、専門は経済学だ。本書は、いわば一経済学と教育学の「融台」のなかから生まれたものだといっている。大学の教育学部は、「制度的に教員養成が目

的化された学部であり、編著者は、「そのなかの社会科教育講座の一教員」(本書 185P)である。経済学部の「経済学」と教育学部の「経済学」とでは、外部から見たらそんなに違いはないと思われるが、当事者(教員・生徒)にとっては明確な境界線があるようだ。当たり前のことだが、大学は教員が学生に"講義"する場所であると同時に、教員、自らが選んだ専門的な事柄を考究する場所でもある。しかし、専門学部内であれば、いわゆる学際的立場を表明できるが、編著者のような場合は、「経済学」を専門分野として認知されにくいという事態が生ずるようだ。

「(略)ぼくは教員養成系の教育学部に属する経済学の教員であって、『マル経』(マルクス主義経済学)だの『近経』(近代経済学)だのといった派閥とは無関係なところに籍を置いていました。自派のゼミに何人学生を獲得できるかという競争意識にさいなまれることもありませんでしたし、大学・学部や学会での地位を上昇させる生存競争とも無縁でした。」(23P)

こういう立場を、率直に表明できるからこそ、経済学と教育学の「融合」が可能となるのだといってもよさそうだ。編著者の島岡は、「教育学部といつところは、ある意味で息苦しいところ」だと述べているが、それは、かりに専門学部であっても別の意味で"息苦しい"はずだ。特に、本書の過半を占める「第一部 逆倒＝関係系アプローチの理論」という島岡の論稿は、「息苦しさ」からの脱却を図ろうとする苦闘の様子が、窺えるような気がする。プロローグで、次のように述べていることが、そのことをよく表していると思われる。

「ぼくはカール・マルクスから多くを学びました。マルクスは、彼の時代(十九世紀西欧)最高の科学的遺産を駆使しました。ぼくは二一世紀のはじめで可能な限りの科学的遺産を利用しようと思います。ことさらにマルクスが『見落とした』部分に光を当てることを意図したのは、彼から強い影響を受けたからに他なりません。本書は『脱「経済学」宣言』でもあります。(略)この脱『経済学』の研究プロセスを一言で表すならば、オープンな内発的発展(endogenous development)です。」(5P)

大学や学会での地位の上昇といった息苦しきから、無縁な場所で自分なりの開かれた「経済学」を模索する姿勢が、このプロローグでは語られているといつてもいいはずだ。

イヴァン・イリイチが提示する「コンヴィヴィアリティ」という概念(共に愉しく生きることという造語)を援用しながら、マルクスの『資本論』を分析し、カール・ポランニー、ミハエル・エンデらにウイングを広げて論旨を進めていく手さばきは、あざやかである。

そして、本書の眼目は、第一部第五章の「野麦峠を越えて—脱『講義』＝歴史の場所化の試み」と題された、しまおかこういち(編著者、島岡岡)の「報告」だ。

山本茂実の『あゝ野麦峠—ある製糸工女哀史—』に啓発された島岡は、イリイチの「コンヴィヴィアリティ」を実践化するために、「自発的、独立的でありながら、それでいてお互い関連しあっていくことのできる生活様式」を授業様式として考え、<野麦峠越えゼミ>を企画した。

中央アルプス乗鞍岳の南、岐阜県と長野県の県境にある標高一六七二米の野麦峠への往還を最長五泊六日で行なう台宿ゼミは、一九七七年に始めて、山本茂実がなくなった一九九八年に第二〇回をもって終えたという。このしまおか「報告」では、これまでに参加した多くの学生たちの"声"が収められている。第二回と最終第二〇回に参加した中学校の社会科教員を二三年勤めた後、大学院に入った雫智恵子の感想が、印象的だ。

「徹底して歴史の現場に立つ...『人間の顔が見える』社会科作りに取り組んでいた...生徒といつも積極的に現場に入り込んで行くという方法を、野麦峠越えから受け継いだ。」(205P)

こうして、新たな「教育学」の回路を、本書から読み取ることができるといってもいい。(評論家)